

第七章 成功の果実

TIPLOの業績躍進で、林家の負債は一段落。当初の失策が招いた事務所の損失も取り戻し、経営は毎年黒字。敏生の「ゼロ負債」方針のもとで、蓄えは年々増える一方。

利益をどう活かすか？ マネーゲームの風潮も起こっていたが、敏生はやはり典型的な台湾人。まず安住の地を求めて、オフィスを購入した。TIPLOの新事務所がここに誕生する。

老爺飯店の旧地にあった中山北路の事務所は賃貸。広さも五十四坪と手狭。近くに二〇坪ほどの分室を設けていた。家賃は高くないが、家主の顔色をうかがい、いつ追い出されるか分からない不安があった。

「部屋さがしに行こう！」 敏生は張蒼浪を誘うと、ふらっと町に出た。中山北路に沿って南へ、南京東路を左に曲がる。

南京東路は台北市の主要幹線の一つ。六車線の大通りはなかなか立派である。今ほどではないが、商店、会社の立ち並ぶ商業地区の一つであった。駅からも車で十分と便利だ。これから大いに発展するだろう。

敏生と張副所長は歩きながら、売家をさがして辺りを見回した。あれは一九七九年の六月。外はもう夏の日差しで、汗だくになっていた二人は、建築中のビルの前で足を止めた。

「こんなに太い鉄骨は見たことがない。」と敏生。傍らの張副所長も「なかなかいい場所だ。」二人はさっそく中に入って値段を聞いた。

この年は対米国交断絶の翌年。台湾の国際的地位は奈落の底。政局の変化に辛酸を嘗めてきた台湾人は、この機に乗じて中国が、攻めてくるのではないかと心配していた。台湾が戦場になる。恐怖に駆られた人々は、狂ったように海外脱出をはかった。アメリカやカナダの駐在機関には連日、長蛇の

列ができた。しかも彼らの多くは資産家。そんな時節である。台湾の不動産は暴落していた。

こういう風潮に追隨する気持のまったくない敏生には、好機到来である。ビルの値段は一坪八万二千元。ワンフロア四四五坪。十階が売りに出されていた。

「フロアの半分でも買えるか？」と聞くと、「もちろんです。」と言う。敏生の決断は早い。「残しておいて。手付け金はあさって持つてくる。」と、敏生は服を買うような調子。

このビルが蔡萬霖のものだと知った敏生。建国中学の先輩蔡萬徳氏の関係で、一坪八万一千元に値引きしてもらった。

ところが三日目、小切手を持っていくと、ビルは完売したという。「騙された！」怒り心頭に発した敏生。その場で仲買人をこっぴどく叱った。

若く見られるというのが一つ、決断が早いというのが一つ。巨額の売買には「威厳」が欠けていたのかもしれない。しかしビルの仲買人は、敏生の出現をうまく利用して、執拗に値引きを求めていた環球セメントに、最後の決断を迫ったのである。敏生は蚊帳の外。気づいた頃には、人の物になっていた。怒るのも無理はない。

ところが傍らから「十階は蔡萬霖のものだが、七階は蔡萬徳の所有。まだ売れていない。」と教えてくれた人がいる。

さすがに蔡家は台湾一の富豪。不動産暴落のこの時節に、建設中のビルにまで買い手が殺到するとは。

蔡萬徳氏を訪ねた敏生。「非は、約束を破った相手側にある。七階は是が非でも私に譲ってもらわなければ。」と切り出すと、もともと売る気になかった蔡萬徳氏だが、謝罪の意味も込めて、已むを

得ず一坪八万一千元で敏生に売却。数百万元の小切手を切って、敏生はこうして七階の半分を手に入れた。

事後、蔡萬徳氏の義侠心に感服した敏生。彼に数万元の時計を贈呈している。

ビルの名前は「偉成大楼」。南京東路二段一二五号にある。

一九八〇年五月、TIPLOは内装を終えた新オフィスに引っ越し。心機一転。きれいな新居に、当時約五〇名の所員は、一様に奮い立った。

一九八四年、七階のもう半分、お隣の東洋メリヤスが十四階に引っ越し。陳董事長から丁重な購入の打診を受けた敏生。その場で承諾。一坪十四万で購入した。

事務所は四四五坪となったが、成長を続けるTIPLOには、それでも足りず、六階が空くと直ちに借り受け、アメリカの蘇木事務所に倣って室内をぶち抜き、上下通用の階段を作った。偉成大楼には所員に対するような親しみを感じていた敏生は、どこかに売りが出ると、もらさず買い受けた。今では六、七、九、および十四階、合わせて一二〇〇坪がTIPLOの所有になっている。ここで働く所員は一五〇名。一人当り八坪のゆったりしたスペースである。九〇人収容のホールも造った。一九九四年の弁護士職前訓練は、こゝで行われた。

財テクはほとんどやらない敏生。台湾伝統の「頼母子講」にいたっては、所内に禁令を出すほどだ。「内々でやっているかも知れないが、私自身は絶対反対だ。頼母子講で父が残した巨額の負債に、懲りているせいだろう。」

不動産の他に敏生が投資するものといえば、所員の訓練と娯楽。

TIPLOでは一九七三年から毎年、事務所全額負担の社員旅行を実施している。創立二十五周年

には韓国にも行った。来年（一九九五年）一月は三十周年。敏生は幹部を日本に連れて、東京のハイアットホテルで、日本の友人、顧客も交え、五〇〇人のセミナー及び大パーティーを開く予定にしている。

所員とその家族には気分転換が必要だ。厳密に言えば娯楽は投資ではないけれど、敏生は「休息はさらに歩き続けるため」の投資だと考えている。

ゴルフが敏生の余暇の娯楽となったのは一九七六年から。ただ、ゴルフに関しては夫人の方が一枚上手。事務所を辞めてから、健康のため本格的にゴルフの練習を始めた林夫人は元百メートル走の国体選手。みるみる腕を上げた。林家に飾られている大小さまざまなトロフィーやメダルはほとんど彼女のものである。盗み出して我が物に。敏生は真剣にそう考える時がある。とはいえ敏生の腕も悪くない。淡水ゴルフ場ではハンデイ十二の記録がある。（夫人は八）。最高の成績はワンラウンド七十九ストローク。一九九〇年には淡水ゴルフ場会長カップで男子組チャンピオン。一九八二年APAAタイ会議の際のゴルフ大会でも優勝している。建国中学OBチームと台湾大学六十周年総統杯はいずれも敏生が創設したものだ。プレイしなくなったのは台北弁護士会の理事長になってから。腕もだいぶ落ちただろう。今でも残念な思いをしている。

ゴルフはいつも夫婦一緒。だが、目を見張るばかりの上達を見せたのは夫人の方。淡水、林口、新豊、いずれのゴルフ場でも、女子組の総合優勝をさらっている。一九八二年の淡水ゴルフ場オープンでは、新参メンバーの林夫人が群を抜いた。三十六ホール八時間のプレーオフは、敏生の描写によれば「宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘のような」張り詰めた雰囲気。応援団を擁した敵は辺りを圧する勢い。対する林夫人は一人静かなゲーム運び。観衆の注目する中、林夫人はみごと優勝を飾った。喜

んだ敏生。国賓飯店に十二テーブルの宴席を用意して盛大に祝賀会を開いた。挨拶に立った敏生は、「求愛時代。淡水で教職にあった妻を訪ねに行くと、そばのゴルフ場で、老人たちが棒を振り回して小さい玉を打っていた。あの頃は、どこが面白いのだろうと思っていたが、数十年たった今、このゴルフ場で私の妻がチャンピオンになるとは、思えば不思議な因縁だ。ただ、一つ言っておきたいのは、家内は、妻としての勤めを十分に果たしている本当の『アマチュアチャンピオン』。ここに来る前も、朝御飯をちゃんと用意してくれた。」と話すと、会場の男たちは拍手喝采。女たちも笑顔で聞いていたが、心では「ふん、余計なことを！」と苦笑しく思っていただろう。

敏生もかつてはゴルフ狂。一九七七年から一九八〇年の三年間、浜江街のゴルフ練習場では常連。仲間は建国中学の同窓林進暉、劉榮寬と林夫人。あの起伏の多い新淡水ゴルフ場で三ラウンド回ったこともある。台北近郊の淡水、林口、新豊、新淡水、台北、百齡といったゴルフ場にはすべて入会。毎週二、三回はコースを回った。週末、ゴルフのせいで欠勤するのが後ろめたくて、結局、TIPLOを隔週五日制にしてしまった。夫婦連れ添って、わざわざ世界最古、ゴルフの聖地といわれるSt Andrewsにも行った。台湾でもっとも著名なプロゴルファー陳志明とは家族のような付き合い。陳志明夫妻は林夫人を「お姉さん」と呼び、「姉婿」の敏生にも、誕生日になると日本から桃の御祝いが届く。

近頃、ゴルフにすっかり御無沙汰の敏生。仕事で身を削るような敏生の働きぶりに、林夫人は心を痛める。年をとれば楽をしたがるのが当然。成功の果実をゆっくり味わう年齢なのに、敏生は物に憑かれたよう。次から次へと目標を定め、自らを奮い立たせている。